IS☆LESSON≪幸せへの授業(生き方)≫

凡骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ☆ＬＥＳＳＯＮ≪幸せへの授業（生き方）≫

【Ｎコード】
Ｎ８７８９Ｘ

【作者名】
凡骨

【あらすじ】
インフィニット・ストラトスとＨＡＰＰＹ☆ＬＥＳＳＯＮのクロスオーバー作品です。
初心者です。初投稿です。「ＨＡＰＰＹ☆ＬＥＳＳＯＮってなに？」と思いでしょうが、どうか暖かい目で見て、読んで頂けたらと思います。

※また新しくタイトルを変えました。ややこしくてすみません。ｍ

m

プロローグ（前書き）

未熟者ですがよろしくお願いします。プロローグです。どうぞ。

プロローグ

ＩＳ（インフィニット・ストラトス）が世界に現れて１０年。世界は女尊男卑の風潮が強く広まった――――。そんな最中、起こるはずがなかったであろう出来事が、静かに起こった。

――とある養護施設――

「チィーっす。」

「あ、チトセ兄ちゃんだ！！」

「えっ！？あぁ～、ホントだぁ～ッ！！」

「よぉ、みんな。元気してたか？」

ここは彼が高校入学まで暮らしていた養護施設。彼は『新しい家族』と共に、約２年半振りに訪れた。

「ここでチトセさん達が育ったんですねぇ。」

「えへへ、私達のもう一つのお家です！」

「ちっちゃい子がいっぱぁ～い。みんなぁ、うづきと遊ぼぉ～！！」

「おいおい、どっちがガキンチョか分かんねぇな？」

「フフっさつきさんも、遊びたくてウズウズしてるのが丸分かりよ。

」

『新しい家族』、彼と共に施設で暮らした妹的な存在。そして、あるキッカケで彼の母親代わりとなった5人の女教師。彼女らママ先生達との奇妙な同居生活も、はじめの頃は戸惑いやすれ違いなどが多々あったものの、本当の家族のような、いやソレ以上の強い絆を彼らに与えるキッカケとなった。

「チトセさん・・・そろそろ・・・・・・待たせては・・・彼女に悪いので・・・」

チトセと呼ばれた彼、仁歳チトセ（ひととせちとせ）は、5人のママ先生達の1人、二ノ舞きさらぎの言葉によって本来の目的を思い出した。

「おっと、そうだった。なぁみんな、『ウサギの耳を生やしたお姉さん』知らないか？」

――施設の裏庭――

「そろそろ時間だね。久しぶりにきーちゃんに会えるよ～。」

そこに居たのは、まるで『不思議の国のアリス』のような青いエプロンドレス。そしてなぜかメカニックなウサ耳（？）を頭に付けた女性。彼女こそが天才科学者にしてＩＳの生みの親、篠ノ之束その人である。

「あっでもぉ、『自慢の息子を紹介する』って言ってたけど・・・、

いつの間に結婚したんだろ～？」

「う～ん」と、唸りだす素振りをする束。彼女の傍には機械の巨体、ＩＳが静かに佇んでいた。

仁歳チトセと篠ノ之束。二人の出逢いが、始まるはずがなかった物語を始めてしまうのでる。そしてそれはチトセにとって、新たな授業（生き方）の始まりでもある。

プロローグ（後書き）

時期掛けて書いた割りにあんまり長くないですね。

今回はチトセがＩＳと、と言うか束とどうやって関わりを持ったのかを書いてみました。

話に登場したきさらぎは、世界征服を本気でやろうとしていた頃がありました。なので束と並ぶ天才科学者でもあります。一応。

つまりきさらぎ経由で出会ったと言うことですね。（束ときさらぎは何処かで知り合って仲良くなったと言う事で）

ちなみにこのプロローグの時期は学園入学よりも半年前です。

チトセは基本的に学力が低いので、半年もなきゃ必読のアレも全部覚えられないかと。こうでもしなきゃ学園の特記事項まで覚えられず、下手すれば一夏以上にひどくなるかもしれません。

と言う訳でチトセにはＩＳの基礎知識を全部覚えてもらいます。（我ながら鬼だな）

次回は学園入学まですっ飛ばします。プロローグの続きの話はまた後程ということでご勘弁を。

あ、後ヒロインは一人決めております。もちろんＩＳのキャラです。

では、また次回で。

第1話　男に見えなきゃ眼科行け（前書き）

サブタイ適当ですが気にしないで下さい。とりあえずチトセと一夏の初対面までです。
どうぞ。

第1話　男に見えなきゃ眼科行け

――ＩＳ学園校舎内――

「失礼しま～す・・・・・・。」

入学式当日、やる気のない言葉と共にチトセは職員室へ入る。式が丁度終わった後にだ。

「入学式当日に堂々と遅刻とは、いい度胸だな・・・・・・。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

入室直後、異様な威圧感（プレッシャー）を放たれ膝をつきかけるチトセ。しかし、足腰を踏ん張らせ何とか姿勢を保たせた。

そして、俯きかけた頭をゆっくりと上げ、自身の目の前に威圧感を放ちながら仁王立ちしている女教師を目視する。

女教師の背後に燃え上がるように溢れ出た怒気が目視できるのは彼だけではないはず・・・・・・。

「ラ、ラ〇ウ・・・・・・っ！？」

ハッと、自身の失言に気付いたチトセだがその刹那、出席簿による重い一撃が・・・

スパァァァンッ！！

脳天へと降り下ろされた。

「誰が世紀末覇者か。」

「す・・・すんません・・・・・・・。」

頭を抑えて痛みに耐えながらも謝罪の言葉を絞り出すチトセ。頭にはたん瘤ができていた・・・・・・。

「ふん、まあいい・・・早速教室へ行くぞ。ＳＨＲが始まっている頃だ。」

「いててて、ういっす。」

「返事は『はい』だ。」（ギンッ）

「は、はい・・・。」（汗）

（相変わらずおっかねぇ～！！このヒト一生独身なんじゃねぇの？誰がこのヒト嫁さんに出来んだか・・・）

「・・・お前、今失礼なこと考えただろ？」

「・・・・・・すんません。」

スパァァァンッ！！

またもや重い一撃が炸裂し、たん瘤がより一層大きくなった。

――校内廊下――

「あの、織斑先生。」

「なんだ？」

1年1組の教室へと向かうチトセと、1組担任の女教師・織斑千冬。その途中、チトセは自身の気がかりとなっている『ある事』を千冬に訊ねた。

「みな、じゃなくてその・・・六祭さんは、何組に？」

六祭みなづき（ろくまつりみなづき）　チトセにとって大切な家族、そして妹だ。みなづきもＩＳの適性能力が高いという理由で、ＩＳ学園へ入学することが決まったのだ。
ＩＳ学園へ入学することについて、チトセはあまり乗り気じゃなかった。何せＩＳ学園には女性しか居ないのだ。前例（？）があるチトセにとっては居心地が悪い以外の何物でもない。だが、みなづきも入学することとなったので、覚悟を決めたという。言い方を変えれば、腹をくくったのだ。

「六祭は4組、別のクラスだ。確か日本の代表候補生も一緒だった筈だ。」

「そっスか・・・。」

「そんなに気になるのか？」

「・・・そりゃあ、妹っスから。」

兄としての性なのか、妹であるみなづきが心配で気が気じゃないチトセ。

彼も立派なシスコンである。

（ん、なんか知んねえけどイラッと来たぞ？）

「どこまで行く気だ？クラスは此所だぞ。」

ふと気がつくと、いつの間にか通りすぎていたらしい。頭をかきながらチトセは千冬の傍まで戻る。

「生徒の自己紹介が始まっているな。先に入るから、呼ばれるまで待っていろ。」

「はい・・・。」

千冬が教室に入って数秒後・・・

スパァァァンッ！！

自身も二度喰らった出席簿アタック（技名）の炸裂音が教室の中から響いてきたので、チトセは顔を歪めた。

「げえっ、関羽！？」

スパァァァンッ！！

（なんで三國志なんだよ？）

変な叫び声の直後、またもや出席簿アタックの炸裂音が響く。そして暫く話し声が続いた後、今度は黄色い声援が上がった。チトセは発せられた声量に驚いたが、その黄色い声援に耳を傾けてみた。

「キャーーーーーーー！！！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずぅっとファンでした！！！」

「私、お姉様の憧れてこの学園に来たんです、南関東から！」

（何処でもいいっつーの。）

女子達に内心呆れながらもツッコむことを忘れないチトセ。史上最強のＩＳ操縦者・織斑千冬。彼女の信者達が自分のクラスメートとなるのかと思うと、入学したことを少し後悔した。

「それと、このクラスには後1人生徒がいる。入学式当日だというのに、堂々と遅刻して来た大馬鹿者だ。入ってこい。」

（やっとお呼びが掛かったか。つーか、ひでえ言われようだな・・・。）

――1年1組教室内――

ガラガラッ

教室に入り、教壇まで歩いていくチトセ。まるで転校生になったみたいだな、と思いながら正面へ体を向ける。

（し、視線が痛えな・・・。）（汗）

見渡すと、クラスメートの殆どが驚きながらも自分を観ている。「う、うそ・・・」「男子がもう1人？」などと、小声だが此方まで聞こえてくる。

「あ～、仁歳チトセだ。趣味は昼寝とゲーム。・・・・・・よろしく。」

面倒臭そうに、チトセは自己紹介を適当に終わらせた。そして前列の中央、教壇の前の席に座っている男子が、呆けた顔のままこう言った。

「お・・・男、なのか？」

「ああ？見りゃ分かんだろーが。」（怒）

男子の発した言葉に苛ついたチトセは、少し荒っぽく返事をした。

その男子こそが、史上初の男のＩＳ操縦者として世界にその存在を知らしめた男子、織斑一夏である。

チトセと一夏。この日、２人は邂逅した。

第1話　男に見えなきゃ眼科行け（後書き）

ＴＶ版しか視てないのでＩＳの知識があんまりありません。時間が出来たら原作（ノベル）読み漁ろうかな？

ではまた次回に。

第2話　予習、復習はめんどいけど大事（前書き）

仕事の合間に書いてたりしてますけど、なかなか進みません。ｏｒｚ
今回はみなづき（妹）と簪を登場させました。・・・ちょっとだけ。

第2話　予習、復習はめんどいけど大事

――1年1組教室内――

一夏Ｓｉｄｅ

「ああ？見りゃ分かんだろーが。」（怒）

――アイツとの出会いは最悪だった・・・・・・。――

思わず呟いた一言が聞こえたようで、そう言って俺を睨み付けてきた。こ、怖えぇ～！！目の前にいるアイツは見た目からして不良に見える。俺と同じ学園の制服を着用してはいるんだが、肘の辺りまで袖を捲り上げて、ブレザーは前の方が全開で、Ｙシャツはズボンから出てている。息苦しいのかボタンも上から2つ開いていた。この学園、制服の改造は自由らしいけど、ああやって着崩すのは流石に良くないんじゃないか？

「仁歳の席は織斑の隣だ。さっさと着け。」

「（俺の扱い雑だなぁ）・・・はい。」

千冬姉に促され、そそくさと自分の席に着いたアイツ。あの千冬姉に注意されなかったってことは、あの格好も改造の内に入るのか？

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み

こませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

とりあえず謝っとこう。険悪なムードのまま過ごしたくないし、仲良くしないとな。男子は俺達２人しか居ないんだから。

そしてＳＨＲが終わり、俺は隣の席のアイツ、“仁歳チトセ”に話しかけた。

チトセＳｉｄｅ

織斑先生のスパルタ宣言でＳＨＲは締められた。教師としての立場でもあの厳しい態度は変わらねぇんだな。まあ、当たり前か。こっちが本職なんだし。

「えっと・・・仁歳、でいいんだよな？」

「・・・ん？」

織斑一夏。男でＩＳを動かしたってことで世界中の有名人になったヤツだ。そして、我らが担任の織斑先生の弟でもある。そういや先生からは「男子は２人しか居ないんだ。仲良くしろよ？」とか言ってたけど、さっきもアホみたいなこと言ってきやがったし、なんか俺よりバカっぽい感じがすんだよなぁコイツ・・・・・・。

「さっきは変なこと聞いて悪かったな。俺は織斑一夏だ。ココじゃあ男子は俺達しか居ないからさ、仲良くしようぜ。」

そう言って右手を俺の前に出す織斑。握手しようってか？

「・・・・・・姉弟揃って同じこと言うんだな。」

「へ？」

「何でもねぇ・・・・・・よろしく、織斑。」

織斑の言うことも間違っちゃいないからな。とりあえず俺は了承の意味も込めて握手した。―――なんか周りの女子がざわついてっけど、一体なんだってんだ？

「俺のことは一夏でいいぜ。苗字だと堅っ苦しいしな。」

「そうかい。だったら俺もチトセでいいぞ。」

早速名前で呼び合うようになったか。そんな仲になるのは、もっと時間が掛かると思ってたんだけどな・・・。

「しっかし、男子は俺1人だけだと思ってたからさぁ、すげぇ不安だったんだ。ホント、チトセが居てくれて良かったぜ！！」

「男が2人に増えたって、対して変わらねえんじゃねぇか？」

「1人だけってよりずっとマシさ。それに、男同士でしか話せないことだってあるだろ？」

「・・・・・・まあな。」

コイツ、よく喋るな。そんなに1人が嫌だったのか？

「そういやチトセ。ここに居るってことは、ＩＳを動かせるんだよな？」

「ん？ああ、偶々ＩＳに触ったら起動しちまってな。・・・・・・・それ以来、地獄の特訓だ・・・・・・・。」

あの女ラ〇ウとの地獄の日々は、思い出すだけで恐怖が蘇ってくる・・・・・・。まあ、

そのお陰でＩＳの操縦は上手くやれるようになったんだけどなぁ。

「く、苦労してたんだな。・・・・・・ん？つーかチトセって、いつあ「ちょっといいか？」え・・・箒？」

「・・・ん？」

何か聞いてきたと思ったら、途中から1人の女子が割って入ってきた。ほうきって確か・・・・・・。

「しのののの・・・・・・箒か？」

「一つ多い。と言うか、お前とは初対面のはずだが？」（ギロッ）

「お～こわ。まあ、お前とは顔見知りじゃねぇからな。」

そう言って俺は席を立つ。

「“お前とは”？あ、おい！？」

「チトセ、何処行くんだ？」

「行かなきゃいけねぇ所があっからな。それに、邪魔しちゃ悪いだろ？」

「な！？いきなり何を！？」

「幼馴染みと再会したんだ。積もる話もあんだろ？」

「え？」

これ以上時間を掛けたくねぇから、さっさと教室から出ることにした。

「・・・・・・一夏。」

「ん？なんだ？」

「私達が幼馴染みだと、あの男に話したのか？」

「いや、まだ俺は・・・・・・・って、あっあれ！？」

「・・・・・・仁歳チトセ。なぜヤツは私達のことを知っているんだ？」

――1年4組教室前――

「ここか。」

俺はみなに会うため、1年4組の教室に来ていた。

「あ、ねぇ、あの人！！」

「男子がもう1人居るって、本当だったんだ。」

俺のことがもう広まってんのか？早すぎだろ・・・・・・。っと、いたいた。

「よぉ。」

「あ、お兄ちゃん！！」

「・・・え？」

みなを見つけた俺は、すぐ傍まで近付いた。隣には大人しそうな女子が居る。

「もう友達が出来たのか？」

「うん！簪ちゃん、さっき話してたみなのお兄ちゃんだよ。」

「・・・・・・もう1人の男子が、みなの？」

「ああ、初めましてだな。仁歳チトセだ。」

「・・・更識簪。・・・・・・は、初めまして。」

本当に大人しいヤツだな。と、思っていたら・・・・・・。

「ろ、六祭さんって、仁歳君と兄妹なの！？」

「それならそうと早く言ってよ～！！」

「あれ？でもなんで苗字が違うの？」

・・・・・・ったく、聞いてくんなっつーの。

「お前らには関係ねぇ。」

「あ、え、えっとぉ～。」（汗）

「お、お兄ちゃん！」

「・・・・・・。」

「ハァ・・・ったく。」

俺は頭をかきながら溜め息を吐いた。

「悪ぃんだけどさぁ、その事はあんま聞かねぇでくんねぇか？」

「「「ご、ごめんなさい・・・・・・。」」」

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン♪

「時間か、戻らねぇとな。・・・更識。」

「な、なに？」

「妹のこと、よろしく頼むわ。」

「え？・・・う、うん。」

「んじゃ、また後で。」

「うん、またね。」

――1時限目――

入学式当日だってぇのに、早速授業かよ。どんだけ真面目なんだか・・・・・。

「とまあ、ＩＳに関する説明はここまでです。この時点で何か質問はありますか？」

目の前の教壇に立っているのは、1年1組副担任の『山田真耶』先生。教師にしては見た目が若すぎじゃねぇか？着ている服はサイズが合わねぇのかダボダボだ。そのせいか、胸元が必要以上に開いてて、山田先生自慢（？）の巨乳が強調されている。あんなにデカイ人初めて見たな。ちなみに織斑先生は教壇の横、窓際の椅子に座っている。仕事しろよ担任・・・。

「織斑君、何か質問ありますか？」

「えっと・・・・・・あの・・・・・・・その・・・・・・・。」

なんだ？一夏のヤツ顔色が悪いな。って、汗だらっだらじゃねぇか！？

「・・・・・・ほとんど全部分かりません。」

「へ？」

・・・・・・なんか、大体予想出来た。

「全部分からないんです。」

「ぜ、全部ですか？」

「全部です・・・。」

ＩＳを動かせる女子は予めＩＳの基礎知識を学んでいる。俺はＩＳを動かすことが出来ると分かった半年前から、猛特訓と猛勉強の地獄巡りのツアーを送った。そのお陰でＩＳの基礎知識は嫌と言うほど頭の中に染み付いた。入学前に何度も復習したから、余計にだ。

「織斑、入学前に参考書が送られてきたはずだが？」

つまり一夏（このバカ）は―――

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

何の予習もしねぇでＩＳ（ココ）学園に来ちゃったワケだ。

スパァァァァンッ！！

「馬鹿者が、必読と書いてあっただろうが。」

織斑先生の出席簿アタックが、一夏の頭に直撃した。

第2話　予習、復習はめんどいけど大事（後書き）

チトセは準ハーレムにする予定です。なんだかんだでチトセも鈍い男ですが、一夏ほど酷くはない・・・・・ハズ。
そして、少しずつではありますが、本命（ヒロイン）との距離を縮めていこうと思います。
そして次回は、ついに金髪ロールのあのお嬢様が登場です。
それではまた。

第3話　人との関わりは人それぞれ（前書き）

前回の話で言い忘れましたが、ストーリーをキャラの視点で書いていこうと思います。

第3話　人との関わりは人それぞれ

――チトセＳｉｄｅ――

「参考書を再発行してやる。仁歳、織斑に参考書の内容を1週間で覚えさせろ。」

「おっ俺!?つーか・・・1週間っスか?」

「お前にも出来ただろう?・・・やれ。」

とんでもない無茶ぶりをしてきた織斑先生。独裁者かっつーの。

「・・・・・おい、一夏。」

「な、なんだ?」

「お前、覚える気あるのか?」

とりあえず本人に聞いてみっか。やる気なけりゃ教えても意味ねぇし・・・・・。

「いや、あの本の厚さは幾らなんでも――」

「やれと言っている。」（ギンッ）

「は、はい・・・・・。」ｏｒｚ

姉に頭が上がらないのはコイツも一緒か。こりゃ一夏に付きっきりで教えなきゃな・・・・・・。

――一夏Ｓｉｄｅ――

はあ、入学早々キッツいことになったなぁ・・・・・・。

「では山田先生、続きを。」

「あっはい。でっでは、他に何か質問がある人はいませんか？」

全然分からないけど、また手を挙げるとキリがないよな。はあ、予習してこなかったから自業自得だけど、やっぱヘコむぜ・・・・・・。

「・・・・・・山田先生。」

「あ・・・・・・はっはい！！なんですか、仁歳君？」

ん？挙げているのはチトセか？さっきの千冬姉の口振りだと、チトセは参考書の内容を全部覚えているみたいだけど。つーか、本当にアレを全部１週間で覚えたのか？チトセって実はスゲェヤツなんじゃねぇの？

けど、質問するってことはどこか忘れた所でもあんのかな？

「男子トイレって、何処っスか？」

あ、違った。

スパァアアアンッ

うおっ！？千冬姉の出席簿アタック（チトセ命名）が炸裂した！！

チトセのヤツ大丈夫か？

「授業中だ。休み時間まで我慢しろ。」

「は・・・はい。」

クスクスと、周りの女子の小さな笑い声が聞こえてくる。俺も後で場所聞いとくか。

休み時間、チトセは山田先生の案内で男子トイレに向かって行った。なので今、クラスで男子は俺１人だ。

ま、周りの視線が俺に集中している・・・・・・。チトセェ～！！

早く戻ってきてくれ～！！

と、そんなことを思っていたら――――

「ちょっとよろしいかしら？」

「へ？」

金髪縦ロールの、いかにも『お嬢様』と言う言葉が似合いそうな女子が話しかけてきた。

――チトセＳｉｄｅ――

「ふぃ～、間に合ったぁ。」

山田先生の案内の元、男子トイレに辿り着いた俺は、そそくさと中に入って用を足した。

ありゃ？山田先生まだ居たのか？

「あ、仁歳君。もう大丈夫ですか？」

「そりゃあ、まあ。って言うか、待っててくれたんスか？」

「はい。男子トイレは他にも数ヶ所ありますから、後は織斑君と二人で探してみて下さいね。他にも何か聞きたいことがあったら、遠慮なく言って下さい。私は先生ですから、力になりますよ。」

「・・・・・・。」

そんなことを伝える為に態々待っててくれたのか・・・・・・。

“私はあなたの先生なんですから。”

・・・・・・ふっ。どっかのお節介な教師とそっくりだな。

「え！？あっあの、仁歳君！？」

「・・・ん？ああ、すんません。今ン所は無いんで、大丈夫っスよ。」

いけね、変に間を空けちまったか。って、山田先生なんで顔赤いんだ？

「そそっそうですか！！でっでは、チャイムが鳴る前に教室に戻って下さいね！！」

「は、はい。」

行っちまった・・・・・・。いきなり慌ててどうしたんだ？
っと、俺も急がねえとな。さっき1時限目に遅れてきた一夏に出席簿アタックが炸裂したし。

「・・・・・・仁歳君、優しい笑顔してました・・・・・・。」

この時、山田先生のそんな呟きに、気づく訳がなかった。

――1年1組教室前――

何とか間に合ったか。って、なんか騒がしいな。

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン♪

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げないことね、よくって！？」

さっきまで騒いでいた声の主であろう金髪の女子が、一夏の前から離れていく。

「一夏、アイツになんかしたのか？スゲェ機嫌悪かったぞ。」

「いや・・・・・『自分はイギリスの代表候補生だ』って、いきなり名乗り出てきてさぁ。首席がどうのとか試験で教官を倒したとか。」

「それでなんで不機嫌になるんだ？」

「その後、俺も教官倒したってこと教えたら『私だけじゃなかったのか～』って、ああなっちゃってさ。」

うわ、プライドが高そうだな。面倒くせぇタイプとはあんまり関わりたくねぇのによぉ。

「チトセはどうだったんだ？勝ったのか？」

「いや、俺はやってねぇよ。入学前に模擬戦やった後、『合格だ』って言われただけだ。」

「そういや、地獄の特訓してたとか言ってたよな？模擬戦が試験の代わりってことか。・・・・・・ん？その特訓って一体誰が・・・・・・？」

「・・・・・・お前の姉ちゃんだよ。」

「・・・・・・。」

俺がそう言った後、一夏は目を見開いたまま、絶句した。そして――

「ちちちち、チトセって、千冬姉から――――！！」

スパァァァァンッ

その言葉が言い切られる前に、一夏の頭に出席簿アタックが炸裂する。

「授業を始めるから静かにしろ。それと何度も言わせるな、織斑先生と呼べ。」

先生達に気づかないほどショックか？

つーか、あんなにバカスカ叩かれたら一夏のヤツ、本当にバカになんじゃね？

スパァァァァンッ

「イッテェッ！？」

「お前もだ。この馬鹿に余計なことを吹き込むな、大馬鹿者。」

お、俺もかよ・・・・・・。

「返事は？」（ギンッ）

「「は、はい・・・・・・。」」（汗）

はあ、情けねぇな・・・・・・。

2時限目が終わり休み時間、一夏はダルそうに机に伏せている。

「ああ。織斑、仁歳は職員室に来い。」

ん？なんかあったっけか？

「おい一夏、お呼びだぞ。」

「お、おう・・・・・・。」

・・・・・・こりゃ放課後まで持ちそうにないな。

――一夏Ｓｉｄｅ――

――職員室――

「そら、お前の参考書だ。他の先生が予備としてとっておいたものだそうだ。後でお礼を言ってこい。」

「は、はい。」

千冬姉から投げ渡された参考書をキャッチする。よ、よかった～！！チトセから見せてもらってたけど、何時までも世話になりっぱなしじゃ申し訳ないもんな。

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる。」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ。」

「？？？」

なにがなんだかちんぷんかんぷんなんだが？

「はあ・・・・・・仁歳、この馬鹿に説明してやれ。」

「・・・・・・ＩＳの開発者が篠ノ之博士だってことは知ってるよな？」

「まあ、な。」

篠ノ之博士、本名は篠ノ之束。千冬姉の親友で、箒のお姉さんだ。俺も何度か会ったことがある。

「ＩＳのコアはその製造方法が公開されてねぇから、篠ノ之博士しかコアは作れねぇ。けど、今在る数以上のコアの作成を博士は拒否ってるらしい。だからＩＳの数は世界で４６７機しかねぇんだ。俺達はＩＳを使える男だからな。お前に専用機が用意されるってことは、ＩＳでデータを採って色々調べてぇんじゃねぇの？」

「ほぉ、察しがいいな。本来ならＩＳ専用機は、国家あるいは企業に所属する人間しか与えられないが、お前達の場合は状況が状況だからな。先程仁歳が言った通り、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。」

要するに実験体ってことか。

「てことは、チトセにも専用機が用意されるのか？」

「・・・・・・。」（汗）

あれ？なんで黙りこむんだチトセ？

「仁歳なら既に持っているぞ。」

「・・・・・・え？」

「エェェェェッ！？ききき、聞いてませんよわたしぃっ！！！？」

チトセがＩＳを持っていたことに驚いたが、山田先生は初耳だったらしく、俺以上に驚いている。てか、副担任なんだから把握しとこうぜ？

「まあ、今はこちらで預かっているがな。仁歳、放課後お前のＩＳの起動試験を行う。ＩＳスーツに着替えてから指定したアリーナに来い。」

「え？もう調整が済んだんスか？」

「やったのはアイツと、お前のよく知る“先生”だからな。」

「・・・・・・はあ、どうりで。」

千冬姉が言う“アイツ”って・・・・・・ひょっとして束さんか？あの人にとっては長く掛かる調整ってのも、あっという間に終わる

んだろうなぁ。ＩＳの開発者だし。けど、あの束さんが他人と仲良くするなんて有り得ないよな・・・・・・。それに、チトセのよく知る“先生”って、一体誰なんだ？ＩＳの調整が出来るってことは、どっかの研究所とかの博士？つーかチトセって、その人となんか関係あるのか？

「私からは以上だ。山田先生、後はこの二人をこき使っても構わない。」

「へ？なにを・・・・・・？」

「は、はい。では織斑君、仁歳君。こちらの荷物運びを手伝って下さい。」

「あの～、俺達が呼ばれたのって・・・・・・・。」

「参考書のついでだと思え。」

むしろ参考書がついでじゃん！？

「「はぁ・・・・・・。」」

合ってもなんの特もしないのに、俺とチトセの溜め息がハモった。

第3話　人との関わりは人それぞれ（後書き）

台詞は原作読みながら書きました。おかしい箇所があれば訂正します。
チトセの専用機ですが、クラス代表決定戦が終わった後に設定資料を載せようと思います。
名前に悪戦苦闘中です。ｏｒｚ
ではまた。

第４話　何勘違いしてやがる（前書き）

今回はチトセがキレます。

第４話　何勘違いしてやがる

――チトセＳｉｄｅ――

――３時限目――

１、２時限目は山田先生だったけど、今は織斑先生が教壇に立っている。やっと担任のお出ましか。

「あぁ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。」

ん？クラス対抗戦？なんだそりゃ？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・・・・まぁ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。」

要するに、“戦う学級委員長”ってヤツか。俺としては戦えんのはいいんだけどなぁ・・・・・・クラス長なんて面倒くせぇこと出来っかよ。

「はい。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

おうおう、人気者だねぇ一夏は。まぁ、このまま一夏で決まるとは思えねぇけどな。

「では候補者は織斑一夏と仁歳チトセ・・・・・・他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ？」

「・・・・・・俺、自薦も他薦もされてねぇんスけど？」

「山田先生からの推薦だ。ありがたく思え。」

「え、えぇえぇっ！？わわわ、私はまだ何も言ってませんよぉっ！？」

“まだ”って、何か言う気だったんかい・・・・・・。

「休み時間に言っていただろう？『仁歳君は頼りになってくれそうです』、と。」

「はぅっ！？そそ、それは、そのぉ・・・・・・。」（ゴニョゴニョ）

山田先生が顔を真っ赤にして俯いちまった。俺ってそんな風に見られてたの？つーか山田先生、何で俺をチラチラ見てんスか？

「って、お、俺ぇっ！？」

「さっき呼ばれてただろうが。何言ってんだお前は。」

「い、いや、俺以外にも織斑って居るのかと・・・・・・。」

「・・・・・・お前の頭ン中どうなってんだ？」

「はぁ・・・・・・全くだな。」

一夏のアホ発言に、俺と織斑先生は心底呆れた。んな都合のいい話があるかよ。

バンッ

「待ってください！！納得がいきませんわ！！」

2時限目前の休み時間、一夏に絡んできた金髪縦ロールがそう叫んで立ち上がった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

セシリア・オルコット、ねぇ。プライドの高いお嬢様だこって。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！！私はこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

ケッ。言ってくれるじゃねぇか。ってか、まだ続きそうだな・・・・・・。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれ

は私ですわ！！」

「だったらお前、なんで立候補しなかったんだ？」

デケェ口叩く割には、自分から前に出ようともしねぇんだ。どうせ誰かが自分を推薦してくれるって思い込んでんだろう。

「まさか、誰かが推薦してくれるまで待ってた、なんて言わねぇよな？」

「くっ・・・・。」

・・・・・・図星かよ。

「そんなにクラス代表をやりたきゃ、お前がやればいいじゃん。」

スパァアアアンッ

「お前が勝手に決めるな。」

「あ、ぁい・・・・・・・。」

いってぇ～！！織斑先生、いきなりはねぇだろ・・・・・・・。

「だ、大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で――――」

調子を取り戻したのか、何故か今度は日本をバカにしてきやがった。だったらお前の国は未来都市か？と、思っていたら――――

「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ？」

「な・・・・・・！？」

あ～あ、言っちゃったよ。まぁ、一夏の気持ちも分かっけどな。

「つーか、世界一不味いって、マジ？」

「っ！！」

バンッ

「決闘ですわ！！」

ビシッと、俺の方を指差して決闘なんて申し込んできやがった。何、最終的に俺が火着けちゃった？

「はぁ、面倒くせぇ・・・・・・。」

「なんですって！？」

「あ～はいはい。ちゃ～んと受けますよぉ。はぁ、面倒くせぇ・・・・・・。」

「くっ、馬鹿にして！そこのあなたもですわよ！！二人纏めて相手してさしあげますわ！！」

今度は一夏を指差した。まぁ、俺達二人で挑発したようなモンだしな。自分の国馬鹿にした一夏が許せねぇんだろう。・・・・・・あ、

俺もか。

「お、おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――――いえ、奴隷にしますわよ？」

「俺は喧嘩のつもりでやっから、その心配は要らねぇよ。」

「ふん、野蛮な！まぁいいですわ。イギリス代表候補生のこの私、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！！」

「へぇ～イギリス代表候補生かぁ～。知らなかったなぁ～。」（棒読み）

「くっ、ぐぬぬぬぬぬっ！！」

俺の安っぽい挑発に乗ったのか、怒りを必死に堪えようとするオルコット。そんなに怒んなよ。気持ちに余裕がない証拠だぜ？

「で、ハンデはどのくらいつける？」

「・・・・・・。」

なにを言い出すんだ、一夏（このバカ）は。

「あら、そちらのあなたは早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなぁと。」

「バカヤロォ。」（ビー〇た〇し風）

バシッ

「てぇっ！？」

俺は丸めた教科書で一夏をぶっ叩いた。その直後、クラスメートの殆どが爆笑した。

「え？え？」

周りから爆笑されていることに、全く訳が分からないって顔をしている一夏。ったく、コイツは・・・・・・。

「お前なぁ、ＩＳに関しちゃまだまだ初心者だろうが。そんなヤツに、ハンデもクソもあるかよ。」

「うっ。そ、そうでした・・・・・・。」

ホント、人に世話を焼かせるヤツだな。

「お、織斑君、それ本気で言ってるのォ？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑君と仁歳君は、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ。」

・・・・・・コイツらもコイツらだな。女尊男卑の風潮を真に受け過ぎてやがる。

「・・・・・・じゃあ、ハンデはいい。」

「ええ、そうでしょうそうでしょう。むしろ、私がハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね？」

落ち着きを取り戻したオルコットは、明らかに一夏のことを見下してやがる。・・・・・・ヤベェ、ムカついてきた。

「ねぇ織斑君。今からでも遅くないよ？セシリアに言ってハンデ付けてもらったら？それに仁歳君もさぁ。」

「・・・・・・いらねぇ。」

「そうだ。男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい。」

「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよぉ。それとも、知らないの？」

プツンッ

「知らねぇのはテメーらだろうが。」

「え？」

「チ、チトセ？」

もう、限界だわ・・・・・・。

「女が強い？ただＩＳが使えるってだけだろうが。俺と一夏っつう例外が二人居るけどよぉ、それも“ただ使えるってだけ”だ。それが強さだなんて言えんのか？」

「あ、あの、仁歳く――――」

「山田先生、ここはヤツに言わせておこう・・・・・・。」

「それによぉ・・・・・・テメーらがそこまで言うんだったら、なんで一夏を推薦したんだ？実力があるオルコットじゃなくて、なんで一夏なんだ？」

「そ、それは・・・・・・。」

「そのぉ・・・・・・。」

言えねぇのかよ。どうせ好奇心だのふざけ半分だので決めたんだろ・・・・・・。

「・・・・・・つーかよぉ。」

俺が今一番ムカついているのは――――

「自分から戦おうともしねぇヤツらが・・・・・・他人(ひと)のこと笑ってんじゃねぇよ。」

そう言い終えた後、教室が静まり返っていた。

――一夏Ｓｉｄｅ――

チトセが発した言葉は威圧的で冷たくて、そして鋭く感じた。
『俺達はＩＳを使えるが、ただそれだけだ』
ＩＳの知識も技術もない初心者の俺に、その言葉が重くのし掛かってくる。
“ただそれだけ”、正に今の俺そのものじゃないか。

「そこまでだ。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、仁歳、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める。」

ぱんっと手を打って話を締め、授業を始める千冬姉。
そうだよ、千冬姉に恥をかかせないって、決めたばかりじゃないか。
俺が今やるべきことは、ＩＳの基礎知識を覚えること。一週間後に控えた勝負までに出来るだけＩＳの操縦技術を身につけることだ。

（よし、真面目に授業を聞こう！！）

俺は気を引き閉めて、机の上の教科書を開いた。

――放課後――

「つ、疲れた・・・・・・。」

意気込んだはいいものの、授業に全く着いていけなかった。

「お～い、生きてるかぁ？」

「おぉう、辛うじてな・・・・・・。」

参考書を捨てたツケがこんなにも大きく出るなんてなぁ。

「しっかりしろよ。その調子が続いたら頭が吹っ飛ぶぞ？」

「ハハ、なんだそりゃ・・・・・・しかしまぁ、冗談に聞こえないから怖ぇな。」

今でも頭がパンク寸前だし、実際に爆発しそうだな。

「ああ、仁歳君、織斑君。まだ教室に居たんですね。よかったです。」

「ん？」

「はい？」

――チトセＳｉｄｅ――

振り返ると、教室の出入口に山田先生がいた。どうでもいいけど、教師に見えねぇんだよなぁこの人。俺達と同年代なんじゃねぇの？

「山田先生、俺達に何か用っスか？」

「はい、お二人の寮の部屋が決まりましたので、部屋の場所のメモと鍵をお渡しに。」

そう言って部屋の鍵と一枚の紙を渡してきた。鍵のタグには“１０２６”と書かれている。

「１０２６室か。けど俺、着替えとか持ってきてないんスけど。」

「あ、俺もです。一回家に帰っても―――」

「その必要はない。」

うおっ！？今度はラ○ウ、じゃなくて、織斑先生がきたよ。いきなり出てくるんだよなぁこの人は。

「織斑の方は私が手配しておいた。仁歳の方は荷物が既に届いている。こちらの用が済み次第受け取りに来い。」

「分かりました。」

「ど、どうもありがとうございます・・・・・・。」

俺の荷物って、“あの人達”が用意したんだよな？余計なモンが入ってなけりゃいいけど・・・・・・。

「まぁ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう。」

「・・・・・・。」

この人にとっての生活必需品って、着替えとケータイの充電器しかねぇのか？

「山田先生、購買に歯ブラシってありますか？」

「あ、はい。一応、日常品は揃ってますよ。」

「そうっスか、どうも。」

後で一夏と買いに行くか。

「後、夕食は６時から７時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・・・・えっと、その。」

大浴場・・・・・・なるほど。

「俺と一夏は使えないんスね？」

「あ、はい。お二人には申し訳ないのですが。」

「え、なんでですか？」

・・・・・・一夏（このバカ）は。

「銭湯じゃねぇんだ。男湯なんてあるかよ。」

「えぇっ！？」

「・・・・・・ＩＳ学園は“女子校”だぞ。普通に考えりゃ分かんだろうが。」

「そ、そうだった。けど・・・・・・入りたかったなぁ。」

がっくりと、肩を落とす一夏。ったく、言うタイミングくらい考えろっつーの。

「お、織斑君!?女子と入りたいんですか!?だ、ダメですよ!!」

「へっ!?い、いや、入りたくないです!!」

「えぇっ、女の子に興味がないんですか!?そ、それはそれで問題があるような・・・・・・。」

「・・・・・・あんた、何言ってんの?」

なんでそこまで論点がズレちまうんだか。

「ひぅっ!?ひ、仁歳くぅ～ん、変な目で見ないでくださぁ～い!」(泣)

涙目の上目遣いで、俺に訴えかける山田先生。って、近い近い!!

「や、山田先生・・・・・・・顔が近いっスよ?」

「えっ、きゃっ!?」

「・・・・・・学園内でイチャつくのはやめろ。」

呆れたように俺と山田先生に注意してくる織斑先生。それを聞いた山田先生は、あたふたしながら弁明するが、効果は今一つのようだ・

・・・・・・。

「そんなことよりも。」

「うぅっ・・・・・・。」（泣）

山田先生はスルーされたようだ。

「仁歳、場所は第一アリーナだ。スーツに着替えてさっさと来い。」

「はい。っとぉ、そうだ。織斑先生。」

一夏をチラッと見た後、俺はある提案を織斑先生に話した。

「なんだ？」

「一夏を連れてきていいっスか？今日は勉強見てやれそうもないし、見ているだけでも参考程度にはなると思うんスけど？」

「・・・・・・邪魔はするなよ。」

そう言って織斑先生は教室から出ていった。

「お、織斑先生ぇ～っ！！」

山田先生も慌てて後を追う。・・・・・・なんつーか、ガキっぽいな。

「なぁチトセ、よかったのか？俺が行っても。」

「邪魔はするなっつってただろ？でなけりゃいいってことだ。」

勉強不足の一夏のためにもなるだろうしな。

「ならば、私も連れていってもらおうか。」

「ん、箒？」

「・・・・・・。」

振り返ると、そこには篠ノ之が立っていた。

第４話　何勘違いしてやがる（後書き）

次回は、遂にチトセのＩＳが登場します！！

そして見学者も増える・・・・・・。

第5話　見学もまた勉学、だと思うよ（前書き）

チトセ「俺、なんの手本にもならないと思うぞ？」

一夏「連れてきといてそりゃねぇだろ！？」

簪「ＩＳ・・・・・・早く見たい・・・・・・。」

みなづき「うん、一緒に見ようね。それでは第５話、どうぞ！」

箒「・・・・・・私の台詞は？」

第5話　見学もまた勉学、だと思うよ

――第一アリーナ・ピット――

「・・・・・・おい、何故見学者が増えている？」

ＩＳスーツに着替え、一夏達と共にアリーナへとたどり着いたチトセ。だが、向かう途中で会ったみなづきと簪に『見てみたい』と懇願された。断る理由もないチトセはあっさりと了承し、箒だけでなく二人も連れていくことにしたのだ。

「まぁ、これも勉学ってことで。・・・・・・ダメっスかね？」

別に見られても何とも思わない。そんなチトセに千冬は呆れた。

「仁歳、お前の専用機がどれだけ規格外なのか、お前も分かっているだろう。」

「どうせ一週間後の勝負で皆に観られるんスから、気にしなくてもいいんじゃないっスか？」

「はぁ・・・・・・少しは気にしろ。」

千冬は頭を抑えながら溜め息を吐いた。

「あっあの、私達が居たらダメでしょうか？」

「邪魔なら、出ていきます・・・・・・。」

「いや、構わん。邪魔にならなければいい。篠ノ之、お前もいいな？」

「は、はい。」

いずれ知られること。安直だが尤もな言い分だ。チトセの言い分を聞き入れた千冬は、一夏達の見学を許可した。

「仁歳、お前のＩＳだ。起動させて待っていろ。」

「あ、どうも。」

千冬から自分の専用機を返してもらったチトセは、待機状態のそれを暫く見つめていた。

「・・・・・・お帰り、相棒。」

――チトセＳｉｄｅ――

「・・・・・・お帰り、相棒。」

調整を終えて帰ってきた俺の相棒『桃暦』（とうれき）を見ていたら、思わずそんな一言が出てしまった。

「あ・・・・・・。」

「ん？どうしたの、簪ちゃん。」

「う、ううん！なんでもない！」（／／／／／）

おっと、感慨に浸っている場合じゃねぇな。俺は早速桃暦を身に付けた。待機状態は１２色の小さな宝石が埋め込まれた指輪で、細いチェーンを輪に通して首飾りにしている。

「初めて見たな。」

「ん？何をだ？」

「チトセの笑った顔だよ。授業中は退屈そうだったり、眠そうだったりでさ。クラス代表で揉めた時はメチャクチャ恐かったし。一度も笑顔を見せてないだろ？」

「ああ、言われてみればそうだな。」

・・・・・・篠ノ之、しかめっ面のお前に言われたくねぇよ。

「お前ら、ＩＳを起動させるから下がってろ。」

「あ、うん。分かった。」

「いくぜ、相棒。」

待機状態の桃暦が一瞬輝き、眩しさが止むと俺の身体にＩＳの桃暦が装着された。

色は白と銀のツートンカラーで、機体そのものは量産型の打鉄（うちがね）やラ

ファール・リヴァイヴと比べてスマートなんだそうだ。

「おぉ、スッゲェ！！」

「・・・・・・カッコイイ・・・・・・・。」

一夏と更識の声が聞こえてくる。・・・・・・カッコイイってよ。良かったな、相棒？

「お兄ちゃん、桃暦の調子はどう？」

「ん、ああ。前と全然変わんねぇよ。調整されたのは主に武装の方だしな。」

「・・・・・・仁歳。」

「ん？」

「お前は一体、なにも――――」

『仁歳、此方の準備が完了した。フィールドに出てこい。』

篠ノ之が俺に何か言おうとしたみてぇだが、途中で織斑先生からのオープン・チャネルが展開された。

「了解、すぐ行きます。篠ノ之、悪ぃけどまた後でな？」

「あ、ああ・・・・・・。」

「んじゃ、行ってくるわ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

まぁ、篠ノ之には悪いが後回しだ。俺は、鬼が待っているであろうフィールドへと向かった。

――第一アリーナ・フィールド――

「あ、仁歳君。こっちですよ～！」

「・・・・・・え？」

フィールドに出ると、そこには山田先生が学園に置いてある量産型のＩＳ、ラファール・リヴァイヴを装着して手を振っていた。とりあえず俺は、手を振り返しながら山田先生に近づいた。

「あの、織斑先生は？」

「織斑先生なら管制室に居ますよ。起動試験も兼ねて、私と模擬戦をやってもらうそうです。」

「・・・・・・そう言う事かよ。ホント、イキナリだよなぁあの人。」

俺はてっきり織斑先生が相手だと思っていた。俺を鍛え上げてくれた師匠みたいなもんだから、ただの慣らしでも厳しいしごきをする

のかと予想していたから、なんか拍子抜けだ。

『山田先生は元日本の代表候補生だ。その実力は今でも衰えてはいない。』

「そ、そんな。所詮は候補生止まりでしたし・・・・・・。」

そう照れながら謙遜する山田先生。あの金髪縦ロールに聞かせてやりてぇもんだ・・・・・・。

『では模擬戦をはじめるぞ。武装は、そうだな・・・・・・“睦月”“水無月”“葉月”“長月”以外の八つを使用しろ。その代わり山田先生には本気で戦ってもらう。』

「本気で、ですか？いいんでしょうか？専用機を所有しているとは言え、仁歳君は――――」

「『私から見れば雑魚ですよ？』って、言いたいんスか？」

「ふぇっ！？い、いえ！決してそう言う訳では！！」

「冗談っスよ。・・・・・・まぁ、お手柔らかにお願いします。」

桃暦の武装をフルに使えねぇのはちょっと残念だな。まぁ、山田先生がどういう戦い方すんのか分かんねぇけど、武器が八つも使えんだ。どうにかなるだろう。

『用意はいいな？では・・・・・・・始め！！』

「っしゃあ、行きまーす！！」

「い、行きます！！」

俺と山田先生の模擬戦が始まった。

開始早々、俺は後腰からビーム兵器“如月”を取り出し、山田先生へと突っ込みながら牽制射撃を行う。
銃身が下に折り畳まれ、銃口が2門の状態のそれは、言うなればWマシンガン。2門の銃口からビーム弾が連射されていく。
山田先生もアサルトライフルで応戦しながら、俺から距離を取ろうと上下左右に飛び回る。

「弾幕を張りながら接近して斬りつける、ですか。・・・・・・でもあの弾、実弾じゃない？」

山田先生の射撃を何とか避ける。っと思ったら、避けた先にまた弾が飛んできた！あっぶねぇ～！！回避先が読まれてるのか？或いは誘導されたとかか？・・・・・・どっちにしろ、先生のペースに乗せられてンな。これじゃあ近づけねぇ。

「だったら、一か八かだ！」

俺は、“如月”の折り畳まれた銃身を展開してWマシンガンからライフルに変形させて、エネルギーカートリッジをリロードした。弾はまだ残ってるけど、それならそれで『他の使い方』も出来るからな。

「うおりゃぁあああっ！！」

「え、えぇえぇっ！？」

専用シールド“霜月”を呼び出し左腕に装着させて前に構えながら、山田先生に突撃する。上手く虚を突けたのか、山田先生の動きが止まった。今がチャンスだ！！

ガキィンッ！！

「キャアアアッ！！」

そのまま勢いを殺さず体当たりして山田先生を吹っ飛ばした。俺は“霜月”を収納してすぐに左手に隠し持っていたエネルギーカートリッジを山田先生に向けて投げ飛ばした。けどこれは攻撃じゃない。

ズバァアアアッ！！

俺は投げ飛ばしたエネルギーカートリッジに“如月”で狙いを定め、引き金を引いた。桃色の閃光が一直線に伸び、エネルギーカートリッジを貫いた。

ドガァアアアンッ！！

エネルギーカートリッジが爆発し、俺と山田先生の間に爆炎が燃え上がる。

「ひゃうっ！？な、なにがっ！？」

山田先生は今気づいたみてぇだな。炎が収まって黒煙が周りに拡がっているからよく見えねぇけど、声を聞いただけで混乱していることは分かる。

「仕掛けるなら今だな。」

俺は日本刀型ブレード“弥生”を抜刀し、煙の中へ飛び込んだ。

〔敵機、後方より急速接近〕

「っ！後ろから！？」

「うぉりゃあああっ！！」

ライフルモードの“如月”を連射しながら、山田先生にまた突撃する。向こうもシールドで防御しながら迎撃してくるけど、ビーム攻撃の俺の方が有利だ。

「まさか、ビーム兵器！？」

「ご名答。」

左手で逆手に持った“弥生”を構え、すれ違い様に斬りつけた。

「くぅっ！」

俺は煙の中へ身を隠して新たな武装を展開させる。

「“神無月”、ターゲットロック。全弾発射！！」

〔フルオープンファイア〕

１２連装一対、計２４発のミサイルランチャー、“神無月”を全弾

発射。ミサイルは各々の軌道を描きながらも、標的である山田先生へと向かっていった。

〔誘導弾多数接近、全弾ロックされています〕

「えぇっ！？ちょっ、待ってくだ――――」

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴーンッ！！！！！！！！！！

〔全弾命中、確認〕

「・・・・・・やっべぇ。」

流石に殺り過ぎゲフンゲフン、やり過ぎた・・・・・・。
爆炎の中から山田先生が真っ逆さまへ落ちていく。って、気を失ってんじゃん！！

「今度はマジでヤベェッ！！」

俺は落ちていく山田先生の元へフルスピードで追い付き、抱き上げる様な状態で受け止める。絶対防御のお陰で本人には怪我一つ無いが、ラファール・リヴァイヴは所々ボロボロで煤だらけだ。

「すんません、山田先生・・・・・・・。」

「ふあぁ～。」

あっちゃあ、目ぇ回してるよ・・・・・・・。

『・・・・・・試合終了、ピットに戻れ。』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

うっ！？この場に居ない女ラ〇ウの殺気がメッチャ伝わって来るんですけどおぉぉぉっっ　！！

――一夏Ｓｉｄｅ――

「・・・・・・か、勝った、よな？」

「あ・・・・・・ああ。」

「あ、あはははは・・・・・・。」

「・・・・・・。」

あっという間だった。開始早々撃ち合いが始まったと思ったら、チトセが山田先生に体当たりした後何かを撃ち抜いて爆発させた。煙が晴れた途端にチトセのＩＳから大量のミサイルが発射されて、山田先生に当たりまた爆発。そして落ちていく山田先生をチトセがキャッチした。その後に試合終了を告げる千冬姉の声。なんかスッゲェ怒ってないか！？

「あ、お兄ちゃん！お疲れ様。」

「ああ・・・・・・・。」

フィールドへの出入口から山田先生を抱き抱えたままチトセが戻ってきた。あれ？勝ったのになんで暗い顔してんだ？

「どうしたんだ？浮かない顔して。」

「・・・・・・一夏、今の見て為になったか？」

「え？あ、ああ・・・・・・あっという間だったからよく分かんなかったけど。」

「はぁ・・・・・・やっちゃったなぁおい。やっちゃったよぉ・・・・・・。」

「なんでま〇っちゃんっ！？」

と、チトセにツッコんだ瞬間――――

スパァァァァンッ！！

「いでっ！！」

「やり過ぎだ、大馬鹿者。」

千冬姉がチトセの背後から出席簿アタックを炸裂させた。

「大体、あの戦い方はなんだ？あんなもので、一体なんの参考になるんだ？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

うおっ！？やっぱりメッチャ怒っているよ！！殺気が半端じゃねぇ！！

「すんません。なんの参考にもなってません・・・・・・。」

「ふん。よくもまぁ、あんな大口を叩けたものだな。」

千冬姉からのお叱りを受けるチトセ。と、その時―――

「ん、う～ん・・・・・・え？」

「あ、気がつきましたか？」

「ひ、ひひひ仁歳君っ！？なな、なんで私を、その、あの・・・・・・！？」

目を覚ました瞬間、顔を赤くして慌てまくる山田先生。無理もない。チトセに今、お姫様だっこされているんだから。女の人からすればかなり恥ずかしいんだろう。

「ん？ああ、すんません。立てますか？」

「は、はい・・・・・・。」

ＩＳを装着したままの山田先生を器用にそっと降ろす、これまたＩＳを装着したままのチトセ。山田先生はちょっと残念な顔をしてるけど、なんでだ？

「はぁ・・・・・・起動試験は終了だ。仁歳、フィールドとラファール・リヴァイヴの整備をしておけ。終わるまで帰らせんぞ。」

「は、はい・・・・・・・。」

「あ、あの、織斑先生！ＩＳの方は私がやります。使用したのは私ですし、教師として生徒に丸投げという訳にもいきませんから・・・・・・。」

山田先生が教師らしく見えた。いや、教師そのものなんだけどさ・・・・・。

「ふむ、それもそうだな。ならば仁歳、フィールドの整備が終わり次第、山田先生の手伝いだ。いいな？」

「分かりました。・・・・・・すんません山田先生、助かります。」

「い、いえ！・・・・・・・そ、それじゃあ、早く終わらせちゃいましょう！！」

山田先生、今度はなんか嬉しそうだな。そんなにＩＳの整備がしたかったのか？

「さて・・・・・・お前たち、まだ暇だな？聞いての通り仁歳は手が離せない状況だ。今日届いたヤツの荷物を部屋まで運んでもらうぞ。いつまでも職員室に置かれると、邪魔でしょうがないからな。」

「あ、はい。分かりました。」

「・・・・・・はい、構いません。」

「ま、まぁ、私達の見学を許していただいた訳ですし・・・・・・。
」
「え！？ち、ちょ、待ってく―――」
「いいな？」（ギンッ）
「・・・・・・はい。」ｏｒｚ
はぁ・・・・・・今日は厄日だ。

第5話　見学もまた勉学、だと思うよ（後書き）

戦闘描写が下手ですいません。

次回もオリジナルでいこうと思います。

第6話　男はみんなHだけど年がら年中盛ってるわけじゃない（前書き）

更新が遅れてしまって申し訳ありません。

それでは、どうぞ。

第6話　男はみんなHだけど年がら年中盛ってるわけじゃない

――チトセＳｉｄｅ――

――第一アリーナ・フィールド――

「ふぃ～、終わった終わった。」

アリーナの整備を終わらせて、深く息を吐く。けどまぁ、やることはまだ残ってんだよなぁ・・・・・・。

「しっかし俺、喧嘩みてぇな戦い方になっちまうよなぁ。」

さっきの模擬戦を思い出して、ふと思った。高校生活を始めてから不良によく絡まれて喧嘩に明け暮れる毎日だったから、どうしても喧嘩をやっている時の動きになっちまう。

織斑先生には、「型にはまらない戦い方がお前向きだ」って言われたけど、初心者の一夏に見せても参考にはならねぇよなぁ。

「ま、細けぇことは後で考えっか。」

俺は足早にピットへと向かった。とりあえず今は、山田先生の手伝いに行かねぇとな。

――アリーナ・ピット内――

「山田先生、フィールドの整備終わりました。」

「あ、仁歳君。お疲れ様です。こちらも丁度、整備が終わった所ですよ。」

終わったって・・・・・早すぎじゃね？伊達に教師をやってる訳じゃねぇってことか？見た目は子供っぽいけど・・・・・。

「すんません。俺がボロボロにしたのに任せちゃって・・・・・。」

「気にしないで下さい。私は先生なんですから、遠慮せずに頼っていいんですよ？」

遠慮せずって、ＩＳの整備は先生から進んでやったんだろ・・・・・。

「？仁歳君？」

「あー、そのぉ・・・・・あ、ありがとう、ございます。」

「ふぇっ！？は、はい！」

いや、素直に礼を言うようなヤツに見えねぇのは分かるけどよ、そんなに驚かなくてもいいだろ・・・・・。まぁ、お節介な先生の好意は、ありがたく受け取っておくよ。

――一年寮・１０２６室前――

制服に着替えた俺は、山田先生と一緒に自分の部屋へ向かっている。山田先生は、寮長である織斑先生に用があるんだそうだ。

「む、やっと来たか。」

「お兄ちゃん、お帰りなさい。」

「・・・・・・お、お疲れ様。」

部屋の前には、みなと更識、篠ノ之の三人が出迎えていた。お帰り、か。これから三年間この学園で過ごすだよなぁ・・・・・・。

「ああ、ただいま。悪ぃな、俺の荷物任せちまって。」

「平気だよ。段ボール箱が５つあったけど、丁度五人からあっという間だったよ。」

「そうか。ん？そういや一夏は？」

「織斑は自分の荷物を運びに行った。お前の荷物を運びに行った時、丁度届いていたからな。」

部屋から出てきて俺の疑問に答えた織斑先生。放課後の教室といい、アリーナのピットといい、人の不意をつくように現れる。神出鬼没

だなぁこの人・・・・・・。

「あ、織斑先生。まだこちらに居たんですね。はい、先程の模擬戦で得た戦闘データです。」

「うむ、後で確認しよう。とりあえず今は―――」

「いよっとぉっ！！」

ドスンッ！

「うおっ！？」

デカい音に驚いて振り返ると、デカい段ボール箱を降ろして項垂れている一夏がいた。

「はぁ～。さすがに往復二回は疲れるぜぇ～。」

「おう、お疲れ。」

「おう、チトセ。お前もお疲れ。」

俺と一夏は互いに労い合うが、この先男という理由で力仕事を押し付けられる毎日になるとは、この時まだ知らなかった・・・・・・。

「情けないぞ一夏。男子たるもの、その程度で音を上げてどうする？」

「おーおー厳しいこって。そんなに重てぇのかソレ？」

「うーん、中身は着替えだけだと思うんだけどなぁ。詰め込み過ぎたとか？」

「詰め込み過ぎって、んな大雑把なこと誰がすんだよ？」

「・・・・・・・。」（汗）

・・・・・・何で明後日の方向に顔を向けてんだ織斑先生？

「重たいと言えば、チトセの荷物もそうだぞ。段ボール箱５つも、一体何が入ってんだ？」

「・・・・・・見なくていいだろ。」

ロクでもないモンが入っていたら、メンド臭ぇことになりそうだしなぁ・・・・・・・。

「いやいや・・・・・・確認しようぜ？自分の荷物なんだしさ。」

「ふむ、そうだな。丁度私達も居ることだ。余計な物が紛れてないか調べようじゃないか。」

ニヤリと、悪戯っぽく笑みを浮かべる織斑先生。こりゃ最初から中身を見る気満々だったな？

そんな切っ掛けを作った一夏を呆れながらジト目で見た。

「ったく、余計なこと言いやがって。」

「あ～、悪ぃ。け、けどさ！みんなでやった方が早く片付くだろ！？なぁ、箒？」

「他人を巻き込むな！・・・・・・しかしまぁ、ここまで来たんだ。最後まで付き合ってやるさ。」

んな意気込まなくたっていいだろ。
一夏とまだ一緒に居たいってのが、丸分かりだっての・・・・・・。

「もちろん、みなも手伝うよ。簪ちゃんは？」

「わ、私も、手伝う・・・・・・。」

おいおい、なんで全員やる気出してんだよ！？

「そこまでガキじゃねぇんだ、一人で出来るって！」

「調べると言っただろう。学園(ここ)での生活に不必要な物は、送り返すか処分しなければならなくなる。お前に拒否権は無い。」

・・・・・・どうやら俺の抵抗は、最初から無駄だったみてぇだ。

「どうした？さっさと始めるぞ。それとも、まだ抵抗するか？」

スッと、右手に持った出席簿を顔の高さまで挙げる織斑先生。

「・・・・・・独裁者め。」（ボソッ）

スパァァァンッ！！

「その度胸は買ってやるが、教師は敬うものだ。」
俺の頭に出席簿アタックが炸裂した。
「・・・・・・はい。」
「よし、ならさっさと終わらせるぞ。私達もいつまでも暇じゃないからな。」
だったらさっさと仕事に戻れよな・・・・・・。

――１０２６室・室内――

「そんじゃあ、まずはコレから。」
部屋の中には俺、みな、更識、一夏、篠ノ之、織斑先生、山田先生の七人が居る。早速俺は手近にあった段ボールをベッドの上に置き、貼られていたガムテープを剥がした。
「これって確か、簪ちゃんが運んだ分だよね？」
「うん・・・・・・思ったより、軽かった。」
軽いってことは、中身が少ないのか？それとも、ただ軽いものが入ってるだけとか？

「開けるぞ？」

ガサッ

「え？これって・・・・・・。」

「薬に絆創膏、湿布、包帯、消毒液、ガーゼ・・・・・・栄養剤もあるな。」

その段ボール箱は、でっかい救急箱になっていた。

「ん？なんか貼り付いてるぞ。」

「えーっと、なになに？」

付箋が貼ってあるケースを手に取り、書いてある内容を読み上げた。

「『必要になったら使ってね。』、か。幾らなんでも多すぎだろコレ・・・・・・。」

書かれたメモの最後には『やよい』と、名前が書かれていた。こんなに用意しなくても、学園の保健室へ行けばいいだけだろうに。あの人らしくねぇミスだな。

「ひ、仁歳君！そ、そのケースは・・・・・・！！」

「ん？コレっスか？」

俺が持っているケースが気になったのか、山田先生がケースを指差

す。なんで顔が赤くなってんだ？
調べるために付箋を剥がしてみると・・・・・・。

「・・・・・・。」

「え、えぇっ！？」（／／／／／／）

「あ・・・・・・。」（／／／／／／）

「なっ！？」（／／／／／／）

「へ？こ、これって・・・・・・。」

みな、更識、篠ノ之は、“ソレ”を見て赤面した。一夏は初めて見るのか、訳が分からないって顔をしている。そして織斑先生が俺の肩に手を置いて寄りかかり、覗きこむように“ソレ”を見て呟いた。

「・・・・・・コンドームだな。」

そう、手にしていたメッセージ付きのケースは、コンドームだった。

「『必要になったら』って、コレのことかよ！？」

俺は付箋のメッセージの主にツッコミを入れながら、コンドームのケースを薬箱と化した段ボール箱の中に叩き込んだ。

「ま、まぁ、薬箱（そん中）に入れておけば問題無いだろ？」

「いや、問題あるだろ。逆に不自然だぞ？普通はこんなモノ薬箱に入ってないからな？」

一夏は下手なりにフォローすっけど、篠ノ之から「無理がある」とツッコまれた。

「漫才かよ・・・・・・まぁいい。コレは薬箱（こん中）に入れとくか。」

薬箱の中にコンドームのケースを突っ込み、そのまま箱の口を閉めた。

「さて、気を取り直して残りの荷物を調べるか。流石にもうロクなモンは出てこねぇだろ。」

俺は二つ目の段ボール箱を取り出して、開けるためにガムテープを剥がしていく。

「これって箒が運んだヤツだよな？これも軽かったのか？」

「・・・・・・さあな。重さなどに興味ない。」

一夏に素っ気ない返事をする篠ノ之。んな冷たい態度じゃ嫌われんぞ？

「さ～て、中身はっとぉ。」

段ボール箱を開けると、中には・・・・・・。

「ゲームと・・・・・・マンガ？」

そう、更識の言う通り。ゲーム機とソフト、そしてその下には大量

のマンガ本が敷かれていた。

「え？これって持ち込みＯＫなのか？」

「いい訳ないだろう。馬鹿者が。」

「そうですよ織斑君？学校は遊び場じゃありません。」

織斑先生と山田先生に注意されている一夏を無視して、俺とみな、更識、篠ノ之はマンガを読み始めた。

「お、これ最新巻だ。」

「いや、無視すんなよ！！って、何だよ箒まで！！」

「ん？これは・・・・・・。」

「だから無視すんな！！」

口やかましい一夏を無視して、ある一つのケースを手に取る篠ノ之。

「・・・・・・ひ、仁歳、コレ・・・・・・。」（／／／／／）

「ん？なんだよ？」

篠ノ之は顔を赤くしながら、手に持っていたケースを俺に渡す。そのケースには付箋が付いていて――――――

『愛しあってるか～い？イェ～イ！！（　（≧≦）（　　うづき』

と、書かれていた。・・・・・・嫌な予感がする。
恐る恐る付箋を剥がすと、ソレは――――――

「・・・・・・。」

「エ、エェエェッ!?」（／／／／／／）

「・・・・・・コンドームだな。」

二つ目の、コンドーム入りのケースだった。

「お前もかーいっ!!」

俺はまた、付箋にメッセージを書いた主にツッコミを入れた。

「忙しないヤツだなお前は。この荷物は送り返すぞ?寮生活には必要ないからな。」

「ですよねー。」（棒読み）

「ああっ、俺まだ読んで――――」

スパァァァンッ!!

「お前の所有物ではないだろう。それに、読む必要はない。」（ギンッ）

「は、はい・・・・・・。」

一夏の頭に出席簿アタックが炸裂した。が、俺達は無視して次の荷

物を開ける。

「だから無視すんなって！！」

三つ目の段ボール箱には、トレーニング等に使われる用具が入っていて、全部持ち運びの出来るタイプだ。

「あ、これタンク型のダンベルですね。水を入れて重くする・・・・・・・。」

「鉛入りのバンド・・・・・・縄跳びも・・・・・・・あっ。」

中を物色していた更識が、何かを見つけ手にした途端、顔を真っ赤にして俺の方を向いた。

「？どうした？」

「コ、コレ・・・・・・・。」（／／／／／／）

そして渡されたのは、またもや付箋付きのケース・・・・・・。

『避妊しろよ～♪　さつき』

「あんたはダイレクト過ぎだろっ！？」

三度目となるメッセージを書いた主へのツッコミ。手にしたケースはもちろん――――――

「・・・・・・コンドームだな。」

三つ目のコンドームだった・・・・・・。

「よくもまぁ、なんの躊躇いもなく入れるよなぁ・・・・・・あの人たち。」

「わ、悪気はないんじゃないかな。・・・・・・多分。」

みな、お前も疑ってんじゃねーか・・・・・・。

「うわ、結構入ってんだなぁ。チトセって、筋トレしてんのか？」

「・・・・・・ＩＳが使えるって解ってから、な。」

「そっか。だったら、俺も鍛えた方がいいかな？」

「そうかい。んじゃ、ヨロシク。」

そう言って俺は、トレーニング用具が入った段ボール箱を一夏に渡した。

ズシッ！！

「ちょっ、重っ！おい、丸ごと他人に押し付けんな！！」

「あー、分かった分かった。ちゃんとコンドーム（コレ）も入れとくから。」

「いや、別に欲しくねぇから！」

「いちいち騒ぐな、さっさと終わらせるぞ。次はこれだ。」

そう言って織斑先生は四つ目の段ボール箱を開ける。

「あ、それ俺が運んだヤツだ。」

「・・・・・・工具？」

箱の中にはＩＳの整備用の工具一式と、『簡単に出来るＩＳ整備』と書かれたファイルが五冊が入っていた。

「自分で整備しろってことか？まぁ、しゃーねぇか。専用機持ちだしな。」

「あ、そっか。整備はいつもきさらぎママがやってくれてたもんね。」

「ん？ママ？」

みなの言葉に反応した篠ノ之。母親のことをママって呼んでるヤツが珍しいのか？

「六祭は、母親をママと呼んでいるのか？」

「あ、えっと、そのぉ・・・・・・・。」

「かわいい・・・・・・。」

「か、簪ちゃん！？」（／／／／／／）

更識が言った一言で恥ずかしくなったのか、照れたように顔を赤く

するみな。更識って、人をからかうようなヤツには見えねぇんだけどなぁ・・・・・・意外だな。

「ふむ、これならお前や織斑でも理解出来るだろうな。ファイルの内容を一通り見たが、『打鉄(うちがね)』や『ラファール・リヴァイヴ』の整備にもコレは使えるぞ。正に初心者向きだ。」

「ホントに凄いですね。こんなに解りやすいＩＳ整備の説明文を作成するなんて、一体どんなお方なんでしょう？」

いつの間にかファイルを手にして読んでいる織斑先生と山田先生。織斑先生が次のファイルに手をつけた時、カタンッと何かが落ちる音がした。

「ん？なんだ？」

「む、これは・・・・・・。」

その落ちた何かを織斑先生は拾い上げて確認すると、すぐに俺の目の前に見せるように出した。『念のため・・・・・・入れておきます。　きさらぎ』と、メッセージが書かれた付箋付きのケース。その正体は――――――

「・・・・・・コンドームだな。」

――――――だった。

「念のためってなんじゃいィィィッ！！」

「あ、銀〇風のツッコミだ。」

「・・・・・・チーさん。」

「チーさん？銀さんじゃなくて？」

・・・・・・一夏、ツッコむ所そこじゃねぇ。
つーか、生徒にコンドーム渡す『教師』が何処に居るだよ・・・・・・。

「しかも四つとも同じメーカーだし・・・・・・一緒に買いに行ったな？」

「馬鹿なこと言ってないで、さっさと最後の箱を開けろ。」

「・・・・・・そっスね。」

織斑先生に急かされて、俺は最後の一つを開けることにした。
ちなみにあのファイルは、コピーしたものを整備科で使うんだそうだ。

「ん？これは着替えだな。」

「・・・・・・やっとまともな物が出てきた気がする。」

「そうか？他の中身も役に立つ物が入っていたじゃないか。」

「ま、まあ、いらん物も入っていたがな。」（／／／／／）

「あ、あはははっ。」（／／／／／）

「・・・・・・。」（／／／／／）

最後の最後に、“アレ”が入っているケースが出てきてオチがつく。そんな流れが四回も続いているからなぁ、この中にもあったりして・・・・・・。

と、段ボール箱の隅の方に一通の封筒を見つけた。

「この手紙・・・・・・はづき姉からだ。」

「え、お姉ちゃんから？」

封筒には『八桜はづき』と、送り主の名前が書かれていた。封筒から便箋を取り出して、みなと一緒に読み始めた。

「お姉ちゃん・・・・・・二人に居たんだ。」

「俺達と同じなんだな。なあ、箒？」

「・・・・・・ふん、知るか。」

「知るかって・・・・・・自分のことだろ。」

「そんなこと、今はどうでもいいだろう。」

手紙を読み終えた時、なにやら一夏と篠ノ之が口論していた。

「なんだよ二人とも、痴話喧嘩か？」

「なっ！？何を言い出すんだっ！？」（／／／／／）

「そうだよチトセ。別にそんなんじゃないって。」

「そっ、そんなんとはなんだっ！！」

「うおっ！？なんで怒るんだよっ？」

・・・・・・あんまりからかわないでおくか。

「あ、お兄ちゃん。“ＰＳ”って、続きがあるよ？」

「ん？どれどれ・・・・・・。」

その“ＰＳ”の部分には――――――

『ママ先生達が入れていたから私も入れておくね～♪』

と、書かれていた。・・・・・・入れておくって、まさか・・・・・・。

俺は慌てて段ボール箱の中を漁り出した。

「ん？チトセ？」

「仁歳？」

「え、ど、どうしたんですか？仁歳君？」

「いや、なんか嫌な予感が・・・・・・あ。」

山田先生に返事をしながら漁っていると、“ソレ”は見つかった。

「・・・・・・。」

「「「「あっ。」」」」（（（（／／／／／／））））

「えぇー・・・・・・。」

俺が取り出した“ソレ”を見て、女子三人と山田先生は顔が赤くなり、一夏は信じられないと言う顔をしていた。
そして、織斑先生が呆れた顔をしながら“ソレ”の正式名称を言った。

「・・・・・・コンドームだな。」

まさかの五連続ヒット。トランプゲームのポーカーで言うと5カードだ。

「・・・・・・俺って、節操なしに見えんスかね？」

「まあ、血気盛んな男子だと言うことは確かだな。肉欲の赴くままに女子生徒達を襲うなよ？」

「おっおお、織斑先生っ！？な、何を言ってるんですかっ！？」

織斑先生の返事に、俺じゃなく山田先生が反応した。

「心配無用ですよ・・・・・・“まだ”そんな気分にはなれねぇっスから。」

「・・・・・・そうか。」

そうだ、“まだ”俺は・・・・・・。

「ひ、仁歳君までっ！？」（／／／／／）

「おいおい。それって、いつかは襲うってことかよ？」

「っ！？一夏ぁっ！！」

ブォンッ！！

「うわっ！？ほ、箒！竹刀を振り回すなって！！」

「うるさい！いつからそんな卑猥な思考を持つようになったぁっ！！」

竹刀を振り回しながら一夏を追いかける篠ノ之と、篠ノ之の攻めから逃げ回る一夏。俺の部屋で、ある意味リアルな鬼ごっこが始まった。

「・・・・・・しばらくは退屈じゃなくなるな。」

数分後、一夏と篠ノ之に出席簿アタックが炸裂した。

第6話　男はみんなHだけど年がら年中盛ってるわけじゃない（後書き）

チトセ・みなづき・一夏・箒・簪「作者は嘘つきです。」

ごめんなさぁーい！！

チトセ「投稿が遅れても活動報告ぐらいはしろよな。」

箒「だから貴様は凡骨なのだ。」

一夏「いや、そこは仕方ないだろ。ユーザー名なんだし・・・・・・。」

みなづき「ところで凡骨さん、次回はどんなお話になるんですか？」

はい、次回はチトセと箒が一夏を鍛える話にしようかと思います。

それで余裕が出来たらクラス代表決定戦もちょこっと入れようかと。

簪「わ、私も、ちょっとだけ・・・・・・。」

そうなんです！！本編では簪の専用機を早めに完成させます。そしてみなづきとペアを組ませようかと思います。

チトセ「みなと更識が仲良くなったのは、その為の布石だってことか。」

みなづき「普通に仲良くしたいのに・・・・・・。」

簪「大丈夫・・・・・私とみなは、友達だよ。」

みなづき「簪ちゃん・・・・・・うん、ありがとう！」

一夏「友情っていいもんだよなあ。チトセ、俺達も男同士で仲良くしようぜ。二人に負けないくらいにさ。」

チトセ「やめろ、気持ち悪ぃ。」

一夏「酷くねっ！？」

ははは。それではみなさん、また次回に。

チトセ「んじゃ、またな。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8789x/

IS☆LESSON≪幸せへの授業(生き方)≫

2011年12月16日20時04分発行